

2016.5.31

現代俳句千葉

121号

巻頭エッセイ

俳句と社会性

会長 秋尾 敏



社会性俳句の分が悪い。あれは戦後の一過性のブームで若気の至りだった、という意見が今は多数派であろう。

だが、社会状況と切り離されたところで文学が成立するはずがない。自然詠にしたところで、社会生活の中に葛藤や疎外感があるからこそ求められるものなのである。私たちは、私たちを取り巻く社会状況の中で俳句作家としての精神を育んでいることを忘れてはならない。

明治の海上郡嚶鳴村（現、旭市）に、服部耕雨という秋声会の俳人がいた。樺の海を干拓した豪農の家に生まれ、旧派の宗匠であったが、角田竹冷や尾崎紅葉らの秋声会に共鳴し、明治二十九年に「俳諧評論」という俳誌を創刊する。「ホトトギス」創刊の前年の話である。大阪の無界坊淡水が刊行した『俳諧千々の友』（明治36）には、耕

目次

俳句と社会性	秋尾 敏	1
定期総会		2~4
俳句大会		4~5
諸家近詠		6~7
私の感銘句		8~11
春の吟行会		12~13
津田沼研究句会報告		14
青葉研究句会報告		14~15
柏研究句会報告		15
図書紹介・ひろば		15
会員・会友の近況		16
掲示板		16

雨の次のような主張が掲載されている。

○天地の自然を師とし、高妙深遠なる学理を師とし、古今の詩人を師とす、我れに流なるもの無く、派なるものなし、我は我が法を以つて法となす、芭蕉にも因らず、蕪村にも依らず

当時としてはかなりとんでもない主張であろう。正岡子規より過激である。この強烈な近代的自我が、下総の片隅でどうやって育まれたものなのか、長らく謎であった。

それが、昨年、鴨川市にある房総自由民権資料館の館長、佐久間耕治氏のご教示で明らかになった。耕雨は、千葉県で最初の自由党の党员だったのである。耕雨の近代的自我を育んだのは、自由民権運動という当時の社会状況なのであった。

花鳥諷詠という文学思潮の背景にも、その時代の社会状況がある。いつの時代も、社会性と切り離された文学というものは存在しないのである。

平成二十八年年度

定期総会・俳句大会開催される

平成二十八年三月二十日(日)千葉市文化センターにおいて平成二十八年年度の総会・俳句大会が開催された。総会に先立ち故大畑会長に全員で黙祷を捧げた。並木副会長の総合同会で、檜垣副会長の開会の辞に続き細根菜氏を議長に選出。総会は会員参加者七十六名、委任状一八一名で定足数を満たした。

来賓に東京都区青木栄子幹事長、東京都多摩地区吉村春風子副会長、神奈川県川村智香子副会長の三名の方々をお迎えした。

■総会

総会では次の(枠内横書き)について審議し、いずれも可決した。役員改選で新会長に秋尾敏、新幹事長に並木邑人が選任され、渡辺副会長の閉会の辞をもって終了した。



細根 菜 議長



会場風景

【第1号議案】

平成27年度事業報告

1. 行 事

- (1) 定期総会および俳句大会
 - ① 平成27年度総会 3月15日(日) 出席者 83名
千葉市文化センター
 - ② 同上 俳句大会 同上 参加者 90名
 - ③ 同上 懇親会 三井ガーデンホテル千葉 参加者 59名
- (2) 吟行会
 - 春の吟行会 4月29日(祝日)
野田市清水公園 会場：聚楽館 参加者 78名
 - 秋の吟行会 なし(35周年記念俳句大会開催のため)
- (3) 創立35周年記念大会 10月25日(日) ホテル・プラザ菜の花
 - ① 記念大会 出席者 104名
 - ② 同上シンポジウム 顧問8名による
 - ③ 記念講演 講師・宇多喜代子協会本部特別顧問
 - ④ 俳句大会 参加者 167名
 - ⑤ 懇親祝賀会 参加者 63名
- (4) 研究句会
 - ① 津田沼研究句会
毎月第2火曜日 午後6時より 津田沼1丁目町会会館
 - ② 青葉研究句会
毎月第4木曜日 午後1時30分より
千葉市民会館、千葉市文化センター
 - ③ 柏研究句会
毎月第2土曜日 午後1時より 柏市「ハックルベリー」

- (5) ミニ吟行会 7月12日(日)

銚子犬吠埼エリア 会場 イオンモール銚子店 参加者 20名

2. 幹 事 会

定例幹事会

- | | | |
|-----|-----------|-------------|
| 第1回 | 1月27日(火) | 船橋市勤労市民センター |
| 第2回 | 5月26日(火) | 同上 |
| 第3回 | 8月25日(火) | 同上 |
| 第4回 | 11月24日(火) | ホテル・プラザ菜の花 |

3. 会報の発行

- 116号(2月28日刊)
- 117号(5月31日刊)
- 118号(8月18日刊)
- 119号(12月1日刊)

4. 会員数等(平成27年12月31日現在)

会員 395名、会友 26名、計 421名

【主な異動】

- 入会 9名(新会員 8名、転入会員 1名、新会友 2名)
- 退会 26名(会員 25名、会友 1名)
- (内) 物故者・会員6名
稲川 準、篠田鶴之助、前田清方、神山 宏、大谷昌弘、太田洋子

(3)

〔第2号議案〕

平成27年度会計報告 [平成27年1月1日～12月31日]

収入の部

(単位:円)

費目	予算額(a)	実績額(b)	対比(b)/(a)	摘要
前年度繰越金	1,293,980	1,293,980	100.0	
諸事業収入	1,000,000	1,404,219	140.4	俳句大会、春吟行会
助成金収入	750,000	781,000	104.1	本部より
会友費収入	50,000	52,000	104.0	
35周年特別事業収入	1,100,000	620,000	56.4	
雑収入	10,000	323	3.2	預金利子
合計	4,203,980	4,151,522	98.8	

支出の部

(単位:円)

費目	予算額(a)	実績額(b)	対比(b)/(a)	摘要
会議費	100,000	48,985	49.0	幹事会(4回)他
会報発行費	500,000	521,736	104.3	4回発行(送料共)
通信費	50,000	53,055	106.1	
行事費	1,000,000	840,685	84.1	俳句大会・吟行会
印刷費	120,000	241,201	201.0	チラシ、総会案内葉書、封筒
消耗品費	30,000	37,619	125.4	
交通費	90,000	79,680	88.5	
交際費	70,000	55,000	78.6	関東ブロック会議、他
35周年特別事業費	1,100,000	913,352	83.0	作品集、講師謝礼、祝賀会
雑費	20,000	8,280	41.4	
予備費	1,123,980	0	-	
合計	4,203,980	2,799,593	66.6	

次年度繰越金

(単位:円)

収入合計	4,151,522
支出合計	2,799,593
次年度繰越金	1,351,929

財産目録

(単位:円)


千葉興業銀行野田支店	1,326,663	普通預金
現金	25,266	
合計	1,351,929	


〔第3号議案〕

監査報告書

平成27年度の会計及び事業の執行状況について監査した結果、すべて証票書類と一致しており、正當に処理されていることを確認しました。

平成28年1月19日

監査役 吉野 精 

監査役 長瀬 聰 

〔第4号議案〕

平成28年度事業計画(案)

1. 行事

(1) 定期総会

- ① 平成28年度総会 3月20日(日) 千葉市文化センター
- ② 同上 俳句大会 同上
- ③ 同上 懇親会 三井ガーデンホテル千葉

(2) 吟行会

- 春の吟行会 4月29日(祝日)
- 吟行地: 船橋文学散歩 会場: 船橋市勤労市民センター
- 秋の吟行会 10月 吟行地: 未定

(3) 研究句会

- ① 津田沼研究句会 毎月第2火曜日 午後6時より
津田沼1丁目町会会館(2句事前投句方式)
- ② 青葉研究句会 毎月第4木曜日 午後1時30分より
千葉市民会館(3句事前投句方式)
- ③ 柏研究句会 毎月第2土曜日 午後1時より
柏市「ハックルベリー」(5句当日投句方式)

(4) 各地の句会(ミニ吟行会等)の実施 日時、吟行地: 未定

2. 幹事会

(1) 定例幹事会

- 第1回 1月26日(火) 船橋市勤労市民センター
- 第2回 5月17日(火) 同上
- 第3回 8月 未定
- 第4回 11月 未定

(2) 臨時幹事会 4月5日(火)

3. 会報の発行

- 120号(2月刊) 122号(8月刊)
- 121号(5月刊) 123号(12月刊)

〔第5号議案〕

平成28年度予算(案)

[平成28年1月1日～12月31日]

収入の部

(単位:円)

費目	予算額	前年度予算額	摘要
前年度繰越金	1,351,929	1,293,980	
諸事業収入	1,200,000	1,000,000	俳句大会、春・秋吟行会 (吟行会役員経費)
助成金収入	750,000	750,000	
会友費収入	50,000	50,000	
35周年特別事業収入	—	1,100,000	
雑収入	10,000	10,000	
合計	3,361,929	4,203,980	

支出の部

(単位:円)

費目	予算額	前年度予算額	摘要
会議費	100,000	100,000	幹事会(4回)他
会報発行費	500,000	500,000	4回発行(送料共)
通信費	50,000	50,000	
行事費	1,200,000	1,000,000	
印刷費	200,000	120,000	チラシ、総会案内葉書
消耗品費	30,000	30,000	
交通費	100,000	90,000	関東ブロック会議、他
交際費	70,000	70,000	関東ブロック会議、他
35周年特別事業費	—	1,100,000	
雑費	20,000	20,000	
予備費	1,091,929	1,123,980	
合計	3,361,929	4,203,980	

千葉県現代俳句協会平成28年度役員

○印は新任

〔第6号議案〕

Table of officers and members of the Chiba Prefecture Modern Haikai Association,平成28年度役員. Columns include roles like 会長, 副会長, 幹事, etc., and names of individuals.

平成二十八年年度俳句大会

(後援) 千葉県教育委員会・千葉市・毎日新聞社・千葉日報社

総会を終え、午後からは俳句大会が行われた。参加者は八十五名。司会は高木副会長と高橋事務局長、披露は清水・星野両幹事と徳吉編集部長。大会終了後の懇親会には来賓三名を含め五十六名が参加した。司会は徳吉編集部長。(写真撮影は細野企画部長。会場にみちのくたろう氏からお花を寄贈頂いた。)

俳句大会の成績は左記の通り。

【事前投句(兼題)の部】

- 千葉県知事賞
●千葉県現代俳句協会賞
●千葉県市長賞
●毎日新聞社賞
【席題の部】 席題「陽炎」「蜩」
<入賞者作品>
●千葉県現代俳句協会会長賞
●千葉県教育委員会教育長賞
●千葉県日報社賞
●秋尾敏特選
●青木栄子特選
●吉村春風子特選
●川村智香子特選
●武田伸一特選
●鳴戸奈菜特選
字足らずのやうな喜しやしじみ汁

(伊藤希眸特選)

- 津波来て定年が来て蜩汁
(小出治重特選)
陽炎の太き動悸を見ておりぬ
(塩野谷仁特選)
陽炎とあそんでおれば我はなし
(高桑婦美子特選)
寡黙なる母の戦後史蜩汁
(三苦知夫特選)
陽炎や畑に捨てられたる野菜
(山中葛子特選)
かげろうや晩学という鹽舟
(横須賀洋子特選)
陽炎や慈愛の脚を舐める猫
(渡辺澄特選)
陽炎える人の住めないところにも
(並木邑人特選)
除染ロボットかげろふをまとひくる
(檜垣梧樓特選)
利根川のしじみ貴様は助五郎
(高木一恵特選)
除染ロボットかげろふをまとひくる
<四〇二十位入賞者の作品>(特選句は除く)
かげろふを脱けて大きな翅になる
陽炎に押されたる人転びけり
一斉に過去さらけ出す蜩汁
陽炎のなかあおあおと毛細血管
寄せ書きのノートに陽炎をたたむ
かげろうのはじっこ筋肉増強剤
日本史に原子の汚染陽炎えり
孤独とはそだつものなり陽炎える

陽炎や野に屈折の旅かばん
 一椀にさざなみを聞く蜷かな
 陽炎の宙にまなこを置き忘る
 陽炎のその先母が待つている
 妖怪と行き逢う出雲大蜷
 声あげて少年陽炎を抜けてくる
 夜の蜷現世残れる砂を吐く
 陽炎も君の心も掴めない
 宇宙から見えていますか蜷船
 (その他作品 受付順)
 かげろふよ指切りげんまん内緒だよ
 十三湖にじよんがら節よ蜷汁
 陽炎に近づき陽炎を避けてゐる
 上総にもムシ口旗ありかぎろひぬ
 蜷汁川の流れに添う生活
 蜷汁無心になれる刻が好き
 蜷汁今日幾たびの句読点
 ひとことをはいてすつきり蜷かな
 はるかな喪失かげろうに抱かせる
 過去は水現在も水蜷舟
 あさき夢見しは蜷の月の息
 蜷汁命の粒をかきまぜる
 陽炎の中の再会やわらかし
 満州の野にかげろふを追ふ騎兵
 しじみ汁満面笑みのごとひらく
 陽炎や愛語ひとひらふところに
 簡単なかげろう立ちぬ草の上
 定まらぬ国の行方や蜷汁
 神隠しにされた町からかげろえる
 仏心も反原発もかげろえり

小林 俊子
 福田志津子
 長井 寛
 渡辺 澄
 羽村美和子
 川村智香子
 黒澤 雅代
 斉藤すず子
 佐々木幸子
 細野 一敏
 イザベル真央
 小出 治重
 並木 邑人
 青木 栄子
 上野 紫泉
 高野 春子
 山中 頼子
 秋尾 敏
 高桑婦美子
 久野 康子
 小多田文子
 なかもと淑子
 檜垣 梧樓
 横須賀洋子
 武田 伸一
 楠見 恵子
 高橋 健文
 星野 一恵
 細根 栞

混沌の世や十七音の陽炎へる
 蜷聞く涙の底の砂の音
 陽炎や遠きまほろばの土偶
 非正規の蜷売る声さへ叫び
 海原に人重なりてかげろへり
 うやむやな直喩暗喩や蜷汁
 蜷汁ぷろんぼろんぶるぼろん
 少しだけ反省顔や蜷汁
 陽炎や隈取り筆の水彩画
 江戸の味やまとしじみと覚えたり
 陽炎や天に近づくハイウェイ
 かげろうの遊びごころに水の私語
 この国に飢餓の遺りし蜷汁
 陽炎の警笛一つ都電かな
 デコイチに乗った青春かげろへる
 蜷探る人には隠す入り江川

吉村春風子
 白木 暢子
 高橋 宗史
 高橋 由樹
 大塚 弘毅
 高木 一恵
 東 國人
 石井紀美子
 三須 民恵
 矢野 忠男
 圍 喜江
 高野 礼子
 立花 洸
 中嶋 三雄
 金子 未完
 佐々木 禎

家中の蜷がさわぐ非日常
 久方の巡り合わせや蜷汁
 その先が見えぬどこまで陽炎える
 死の影を抱き陽炎ふ北の海
 北を見る青銅マリアかげろえり
 大陸の間近に見えてかげろいて
 出雲では神に供える蜷汁
 僕たちの街を作ろう蜷汁
 酒沼のしじみ一番と夫はいふ
 陽炎のまんなか豊燃えており
 その心開かぬ独りしじみ汁
 大蜷ピンゴゲームの窓開く
 陽炎の追つてゐるのに押しこくる
 陽炎に並ぶ草食系男子
 ひとことを大切に蜷かな
 蜷汁別れたる日の乳色に

岡田 淑子
 竹内 絵視
 戸邊 光一
 井上けい子
 小川トシ子
 池田 博臣
 鈴木 肇子
 林 阿愚林
 川又 優
 坂間 恒子
 秋山 冷子
 林 ゆみ
 増田 豊子
 森須 蘭
 田口満代子
 徳田 悠子



徳吉洋二郎さん



直江裕子さん



青木一夫さん



高橋健文さん



塩野谷仁さん



清水 伶さん



懇親会場

諸家近詠

山口 夕紀

冬晴や二千歩あるいた足ほめる
 寒いねと家なき猫に声かける
 風雪の門を遺して父母逝けり
 人の世の殺気どこまで亀鳴けり
 春愁の身をさつきからおてんとさま

山崎 政江

海満ちてくる飲食の白障子
 秘仏見て嵌めずじまいの革手套
 新玉の坐礁はお酒許されよ
 ひらひらと雪ひとくちの甘い菓子
 恵方へとまわり道して若がえる

森須 蘭

水仙や会釈するだけの隣人
 蠟梅の背後ぼわんと妻でいる
 待合室の角を支えるポインセチア
 饒舌な猫いて春を引き寄せる
 春立てり嫁した娘の部屋で大の字

桃井美千代

衛星の行方ざわざわ梅かおる
 解体の音止み冬陽もう居ない
 伏している耳朶にも届く雪の音
 風を打ち鬼打ち白き豆闇へ
 五感みな風邪の虜や忘我の日

渡邊 竹庵

しやぼん玉世界の終りまで五分
 一尺の程の背丈や花祭
 石橋を渡つた辺りから四月
 麦青む何度も背負ふランドセル
 じゃんけんはパーと決めたの破れ傘

渡辺 澄

黒い山と呼ばれて久し雪降り
 あたらしい風小鳥来る父帰る
 ぎしぎしの花戦争にきて死せり
 あの犬は戻れたろうか山眠る
 菊人形とは面影か傷痕か

愛甲 知子

雪すぐに解けスクランブル交差点
 木の芽風受胎告知のフレスコ画
 花かんば見に行きたくて羽を縫う
 一山の明るさ窓辺のパセリパセリ
 白藤の濃くなりすぎている真昼

伊東 靖子

春近し旅が話題の美容室
 この年の花へ老女の薄化粧
 妹米寿吾は卒寿なり花仰ぐ
 一邸の消えて五画に花いづこ
 立止る肩へ名残の花吹雪

岩尾 可見

空見上げボンと「ウケザキ君子蘭」
 知らんとはどうゆうこっちゃ紫蘭かな
 春蘭とも呼ばれ紅紫の斑入り
 爺婆の異名があかん春蘭は
 「こめんなさい」下向きに咲く君子蘭

上野 紫泉

やはらかな邪鬼に捕まる暮の春
 老鶯の棲みついてゐる福の耳
 裸木のむかう裸木ピカソ展
 顔のふと恐しや古雛
 ぼうたんの白の充実悔いうつす

秋谷 菊野

そのままでいいよ裸木からのメール
 躰系抜くたび白くなる海馬
 いいこともあるよ入学のたんぼぼ
 桜しべ夫婦の顔が似てきます
 秋深し全ていいえと問診票

池田 幸

日を反し雨あと一気に草萌ゆる
 寒満月見えし齡の綻びかな
 古里に行く道何時しか片時雨
 ロボットの介護の日日へ春隣
 骨埋む地での節分年女

宇佐見房司

三月の水の匂ひや綿のシャツ
 千萬生寺の眼と千の御手にも緑射す
 溝そばを瓔珞として川の神
 栃黄葉豊旗雲を掴まんと
 群青の大河に沿ひて枯野道

市川 進

晩夏光片付け出来ぬ男部屋
 炎昼の街闊歩する長き足
 ピカソ絵の目の裏表春疾風
 たんぼぼの絮幼子がブーと吹く
 戸惑ひの一本の傘初時雨

若林 佐嗣

天災も人災の果て海鼠啼く
 余生には余生の未来梅かおる
 北斎や春を呑み込む波頭
 万朶より一輪床し桜かな
 土割って阿弥陀の光り蔭の臺

明石春潮子

春風を呼んで膨らむ岬の譜
 涛が波となるまで音信不通の龐
 にんげんが人間らしくなるぶらんこ
 反戦も木霊となつてくる田打
 老魂を揺さぶる反戦歌の茶摘

相原 一枝

九十年生きとし生きてきて龐
 生かさるる此処が我が場所大ふぐり
 たんぼばや運賦天賦と言ふけれど
 行くところまで行くつもり花筏
 生き甲斐の水にありけり水中花

石井紀美子

止められぬ男の決意春一番
 針穴より見ている俗世亀鳴けり
 椿見ていて椿に見られてる
 大騒ぎされてる桜遠くする
 夕景は胸中に似て花水木

岩崎 令子

相聞のかそけき遊び野紺菊
 老人と懐中時計アマリリス
 百日紅表面張力甕の水
 自尊心木っ端微塵に秋の空
 炯炯と蜥蜴の目玉鬼子母神

浅野 文子

紫木蓮酸素の薄くなる虚空
 寒鴉正しい発音子に伝授
 時鳥裏を返せば厚顔
 蛇穴に入る二十等身をまるめ
 夕焼けの裏側へ置く日章旗

浅野 天一

春の空仰ぐ羅漢の百面相
 花龐ふと甦る幼き日
 高齢化転生の日のおぼろかな
 おぼろなかな辿る湖面や竹生島
 沈丁やこころり仲良し犬と猫

秋葉 紅陽

三百号師への報告年新た
 年用意豊作と書く備考欄
 過ぎし日を繋ぐ茶の実の零れけり
 スーツ着て不安と期待雪柳
 強東風や苦にせぬ犬が先を行く

荒井 玲

地麦酒のむ鳥獣戯画の第一巻
 壺董一兵卒のうしろから
 病蚩長崎までを目瞑りて
 花ひいらぎ棘失せたるは昨夜の事
 白障子時分の花となりけり

井上けい子

藍染の壺にたゆたふ春の夢
 蚩袋のなかに密かな隠し人
 秋風の吹きぬけてゆく朱雀門
 蓑虫や逆説といふダンディズム
 白菜を割れば顕る観世音

東 國人

皆一步海へ歩めり初日の出
 一陣の風に押されて卒業す
 知恵の輪のはずれない日の蜃気楼
 春麗ら待ち受け画面の猫の笑み
 黒板消したたく眼下の花吹雪

市川 唯子

冬眠のいつしようけんめいな孤独
 廃校のサーカス黒鳥が紛れ
 引込線どこへ氷柱の国遠い
 揚雲雀少女小説すりきれて
 湖一つ春月二つち永遠

イザヘル真央

春帽子かぶつて並ぶ新生児
 叱られて歩く兄弟春爛漫
 風薫る初検診の赤子のドレス
 太き梁の新聞店や燕の巢
 猫力フェの若きオーナー聖五月

石井 稔

永き日や母音の多き子守唄
 ケチャップの春興ハンバーガーの鬱
 無国籍料理とりどりの春野菜
 六角と丸の鉛筆春炬燵
 たましひは透明咳き込んで沈黙

岩岡 方子

角砂糖の素直な分子春の雨
 手動ドア向こうは未来山桜
 鬼やんま父の威厳に触れたよう
 ふらここを漕いで宇宙の境界線
 卒業の宇宙階段モーツァルト

渡邊 廣子

しつけ糸抜いてあしたの花ごろも
 落花踏み「うしろめたい」と足が泣く
 鉛筆のいのちを削る夜長かな
 渋滞を抜けし車窓に射す初日
 有る筈の無き歯の痛む寒夜かな

私の感銘句

小野 功

無条件降伏します日向ぼこ

老人が間引かれそうに寒波くる

戦場の匂ひは知らず梅の花

クロイツェル・ソナタ逃水の速きで

後の世に辻もしあらば風船売

露味噌の苦さ加減と老い加減

すかんぼやあつげらんと飢えており

文庫本サイズの仮寝若葉風

少しづつ西へのめつていくすすき

観自在呆けるまで立つ葱坊主

露味噌の苦さ加減と老い加減

佐藤氏は、昨年の秋に還らぬ人となった。掲

句は遺作となつてしまつたが、句会にはご夫婦

で参加され、その姿が脳裏にある。常に毛筆を

携え、句帳に直接認めておられた。そんな苦み

と渋味を備え、紳士然たる態度は、俳人として

彷彿とさせる老い加減であつた。

岩尾 可見

こおろぎを暗夜行路に誘いこむ

哲学はシンプルがいい蟬の殻

身の内の右に左に行々子

わがものは畑いちまい冬の草

やわらかに言葉をかきね夜の新樹

クロッカス青春の日のインク壺

花乱舞隣にゐても遠い人

蝸牛の渦の真ん中少し鬱

切り干の大根すでに訛りたる

ふるさとに忘れきしもの夕月夜

作者名 号頁

園分 三徳 116 2

北野 耕太 116 3

久保さちを 116 3

清水 伶 117 5

塩野谷 仁 117 5

佐藤 信顕 117 6

下村 洋子 118 3

高野 礼子 118 4

長濱 聰子 119 9

細根 栞 119 10

佐藤 信顕

菊地 京子 116 2

園分 三徳 116 2

柏井 笙 116 3

中條 雅夫 116 15

水野 禮子 117 16

永井 奈々 117 16

松戸 圭 117 16

深山きんぎょ 117 16

下村 洋子 118 3

中村 棹舟 119 9

瀬尾 教子

深緑を潜りて蒼き雲に乗る

花すすき記憶の糸を解いてゆく

春暁の呪文唱える風の穴

後の世に辻もしあらば風船売

寒雷やダムに沈みし木がのびる

露律すずめも露の眼もつ

海水の濃さの平凡牡蠣吸る

冬紅葉湖底に朽ちしものの声

誰もいない私もない公園の秋

霧の枕木目覚めぬ中に始発出る

細野 一敏

わたくしの鬱からころり枇杷の種

寒月光ひりひりひりと田に亀裂

寝返りて寝返りて 凜

後の世に辻もしあらば風船売

終戦の日スプレー缶に穴あける

あるがまま生きると決めてより涼し

仰向けの蟬蟬しぐれ聞いている

能登の塗師小路に消えてちろ虫

遅き日や君等の主語が行方不明

日向ぼこ一ト日生きれば一ト日老ゆ

終戦の日スプレー缶に穴あける

終戦の日の季語、缶に穴をあける動作。穴開

けの器具も売っているが、五寸釘であけている

と想像されます。終戦の後しばらくは国中が貧

しく、子供時の錆びた五寸釘一本を地面に挿し

合つて遊んだ記憶が甦ります。

作者はごみ処理場で爆発させない為にスプレー

缶に空気孔をあけている。それはあたかも戦争

小出 治重 116 3

小野 功 116 4

小林 俊子 116 4

塩野谷 仁 117 5

鈴木美津子 118 2

中里 結 118 3

杉山真佐子 118 4

長濱 聰子 119 9

鳴戸 奈菜 119 12

野口 京子 119 12

菊地 京子 116 2

加藤 法子 116 3

小高 桂子 117 5

塩野谷 仁 117 5

徳吉洋二郎 118 2

長濱 聰子 119 9

羽村美和子 119 10

檜垣 梧樓 119 10

並木 邑人 119 11

林 紀之介 119 11

徳吉洋二郎

を起こさせない、今の幸せを決して壊しては
けないとの思いが頭を掠めたのであろう。季語
の終戦の日の効いた佳句である。

芝崎 梓

風花を仏陀の弟子に貰いけり

うしろにもある青空と逃水と

ふるざとは大鳥籠涅槃西風

桃二つ寂しさ三つ置いてゆく

桃二つ寂しさ三つ置いてゆく

かげろう降車ボタン押す陽炎村

望の月グランドピアノに艶布巾

風薫る死ねば詩人になれそう

青葉谷ふと人消える駅がある

遅き日や君等の主語が行方不明

誰もいない私もない公園の秋

桃二つ寂しさ三つ置いてゆく

淡淡と桃二つと寂しさ三つ置いて行つたと書

かれてはいるのみなのに、ぶつきらばうな取り合

わせにまず、グツときました。そして置いて行つ

た人との間柄は？ この寂しさの質は？ 量は？

と興味津津。もしかしたら、永遠へ旅立って行つ

てしまった人のいとしく切ない置き土産だつた

のかしらと、俗っぽいところ迄深入りさせられ、

心に残る忘れられない一句となりました。

秋谷 菊野

わたくしの鬱からころり枇杷の種

セーターのさみしさ海に呼ばれてる

気負わずに生きるひとり身かたつむり

馬の眸のどの眼のなかも青嶺

目が覚めたところがこの世シクラメン

春水たどり森と陽と原発無無

小林 実 116 2

塩野谷 仁 117 5

重田 忠雄 117 6

白木 暢子 117 6

樋口 博徳 119 9

長濱 聰子 119 9

普川 洋 119 9

羽村美和子 119 10

並木 邑人 119 11

鳴戸 奈菜 119 12

白木 暢子

菊地 京子 116 2

市川 唯子 116 2

斉藤すず子 116 2

植原 安治 116 3

小林 雪枝 116 3

加納ひでこ 116 4

小野富美子 116 4

キャバの死を踏み躪り行く曼珠沙華

藤井 遥

高柳重信は俳句における寓意の重要性を説く。標句は自分を元気づけるのか、他を激励するの

しばらくは生者の行進曼珠沙華

熱燭や雪の匂へる訛り聞く
言うなれば吾も蓑虫揺れており

のかいずれにせよ絶妙な季語の斡旋によって、置かれた状況および意図が明快に示されている。また、グレイプフルーツと理不尽、林檎の皮とメビウス帯の対比の句も秀逸である。

馬の眸のどの眼のなかも青嶺

近藤 栄治

その他には老齡・介護を三句、千葉に因む二句、ジャンルに囚われず二句を選ばせて頂いた。

定年後、就農し甲斐の山の中で馬を飼っている友がいる。間近に見る馬の鼻息は荒く、油断すると鼻水が飛んでくる。眸は時に意地悪に、時にいじらしく見える。

國武 和子

中村 棹舟

蕨にまみれて馬を育てるのは、何故か？

加倉井允子

巻き戻す亡夫との時間大花野

舎から馬を出してわかった。掲句の通りの景を見ることができたからだ。「青嶺」は、孤高なる精神を表しているように思える。瑞々しく詩情豊かな世界を表出している。

北野 耕太

父の日の母の見ている沖の沖

備前長船二本の水柱かな

越野 雄治

冬葦土偶の口の開いたまま

大僧正生姜の匂いしていたり

津高里永子

時雨るや枯山水に石の鯉

うららかやここで休めと石がある

濱谷 徹

手のひらの記憶をともし螢かな

お年玉小さき順に手がのびる

原 悦子

桜見る桜の風に抱かれて

歩く鳥走る鳥いて冬干潟

悦子

春愁い計るでもなく砂時計

裸婦ともなれず寒椿ともなれず

徹

平がなはをみなな化身蝶よぎる

尻餅の大きな窪み雪おんな

濱谷 徹

あの日から沖を見る癖いわし雲

かまきりを箒に乗せて移しけり

原 悦子

日向ぼこ一ト日生きれば一ト日老ゆ

山里は透きとほりたり年用意

悦子

幻聴のそのまま鳥になる雪夜

スケジュール夫で満杯秋の暮

澤田 寿一

日体大卒のごきぶり現わるる

夫の介護をしている妻(作者)の愛情がさらりと詠まれ、気持のよい句。スケジュールが満杯という表現が、疲れや苦勞を表面に出さな

前島きんや

後の世に辻もしあらば風船売

で、明るく前向きな気持を感じさせるからである。毎日夫のことだけで手一杯。秋の日暮れは早い。あつという間に一日が過ぎてしまう。

笠木 瑩子

桃二つ寂しき三つ置いてゆく

田中 喜翔

節分の鬼は優しく車椅子

できぬ決断キャベツ二枚づつはがす

沼山美津江

学僧の蒼きつむりや猫の恋

はじめから月容れて引く広辞苑

袴田 菊子

グレイプフルーツ理不尽をまっぶたつ

切り干の大根すでに訛りたる

袴田 菊子

疎開地の村は市となり敗戦忌

迂闊にも声が年取る寒卵

袴田 菊子

林檎むくたびメビウスの帯となる

大鷲の利尻の山を掴みをり

袴田 菊子

夏帽やこの世の友の見舞ひしに

青空にシユートを決めて卒業子

袴田 菊子

新走り久留里城下の上総掘り

前田 孝子

お互に介護される身々端居

馬場 馬子

市川 唯子

穴まどいいつも道の行きなさい

金澤 恵子

唯子

時雨るる波の伊八の荒ら木彫り

庄司とほる

日体大卒のごきぶり現わるる

節分の鬼は優しく車椅子

澤田 寿一

後の世に辻もしあらば風船売

学僧の蒼きつむりや猫の恋

前島きんや

できぬ決断キャベツ二枚づつはがす

グレイプフルーツ理不尽をまっぶたつ

疎開地の村は市となり敗戦忌

切り干の大根すでに訛りたる

林檎むくたびメビウスの帯となる

夏帽やこの世の友の見舞ひしに

迂闊にも声が年取る寒卵

新走り久留里城下の上総掘り

お互に介護される身々端居

穴まどいいつも道の行きなさい

金澤 恵子

庄司とほる

日体大卒のごきぶり現わるる

高橋由紀子

薫風を持ち帰るなら縄電車 黒澤 雅代 116 2
 米作る人に初日は意志であり 坂本 正夫 116 4
 大ふぐり踏みて銀河に遊ぶかな 倉田たへ子 116 4
 うしろにもある青空と逃水と 塩野谷 仁 117 5
 花に哭け泣かねば散れず又咲けぬ 佐久間眞城 117 6
 木の芽風日本語という柔らかさ 高橋 宗史 117 6
 衰へを涼しさにして半跏趺坐 直江 裕子 118 2
 疎開地の村は市となり敗戦忌 高橋 節夫 118 3
 サンダルのパディキユア真赤熱砂蹴る 福田志津子 119 9
 日向ぼこ一ト日生きれば一ト日老ゆ 林 紀之介 119 11
 日向ぼこ一ト日生きれば一ト日老ゆ 林 紀之介

自覚しているようで自覚していないことをこの句で再確認したように思います。「生きていくことが仕事」という言葉を聞いたことがありますが、それには一寸早く一寸むなししいかな、と思わせる一句でした。まだ細やか乍ら何か目的をもって生きたいと願うばかりです。

日向ぼこの季語で、老ゆることにも穏やかさ暖かさが感じられ、俳句に出合えた倅せ、一日という時間を大切に過ごさねばと実感した次第です。

小張 直子

こおろぎを暗夜行路に誘いこむ 菊地 京子 116 2
 不義理して軒の水柱の太りけり 近藤 栄治 116 2
 日脚伸び介護に暮るる女にも 加倉井允子 116 3
 春暁の呪文唱える風の穴 小林 俊子 116 4
 遠き潮騒十二月八日かな 金田めぐみ 116 4
 おなじ方向むく怖さあり窓の花 椎名 鳳人 117 5
 うしろにもある青空と逃水と 塩野谷 仁 117 5
 できぬ決断キヤベツ一枚づつはがす 鈴木美津子 118 2

本音かな雨後の紫陽花青過ぎて 戸邊 光一 119 9
 採血の菊一輪に昂ぶれり 野口 京子 119 12
 できぬ決断キヤベツ一枚づつはがす 鈴木美津子

誰にでも決断出来無いまま長い間思い悩む事が有るものです。作者は女性なので、台所に立ち食事の仕度でもして居たのでしよう。野菜のキヤベツを手にし、一枚づつ剥がしながら決断しなければと思ひ悩んで居る状態が続きました。キヤベツ一枚づつはがす“このフレーズに作者の心情が深く読みとれて、読者の私達にも感銘と感動を与えてくれる様に思います。

大塚 弘毅

生きるって年寄ることよ花芒 金澤 恵子 116 2
 巻き戻す亡夫との時間大花野 斉藤すず子 116 2
 論談のやがて暴論隙間風 窪田 俊作 117 5
 メーデーを知らぬ若者渋谷混む 高橋富久江 118 3
 疎開地の村は市となり敗戦忌 高橋 節夫 118 3
 冬紅葉湖底に朽ちしもの声 長濱 聰子 119 9
 月明り閉め忘れたる雨戸かな 根岸 ナツ 119 9
 茄子の花元気でまめな夫のゐる 藤井 遥 119 9
 秋風や方陣を為す兵馬備 檜垣 梧樓 119 10
 一人居の夜を時雨に包囲され 野口 京子 119 12
 月明り閉め忘れたる雨戸かな 根岸 ナツ
 日常生活の一小間を平易に詠った作品。おかしいな今晩は。部屋に差し込む月の明かりは妙に明るい。そうだ雨戸を閉め忘れただに違いない。

原 悦子

言うなれば吾も蓑虫揺れており 國武 和子 116 2
 寒月光ひりひりひりと田に亀裂 加藤 法子 116 3

ドーナツの穴の向うは春の街 川上 典子 116 4
 花芒わたしの時間壊れゆく 片山 依子 117 5
 薔薇新芽棘持つことの重さかな 高橋 宗史 117 6
 はじめから月容れて引く広辞苑 千葉 信子 118 2
 大西日多弁な森へ暴論を 田村 隆雄 118 4
 落ちゆくを抱き止められしだれ梅 竹内 絵視 118 4
 喋りつつ写真をごみにする晩夏 馬場 益江 119 10
 一人居の夜を時雨に包囲され 野口 京子 119 12
 喋りつつ写真をごみにする晩夏 馬場 益江
 断捨離と言われて久しい。その中でも写真を捨てるのは抵抗が有りなかなか捨てられないものである。しかし、日常の掃除のように喋りつつだったら案外簡単に行くのかな。でも下五の晩夏で、自分自身の青春をも捨てている様な複雑な心境がにじみ出る。

高橋富久江

穴まどいづもの道を行きなさい 金澤 恵子 116 2
 水澄むや湖底に集落眠らせて 國武 和子 116 2
 校庭の巨きなさくら昭和の子 里見 さち 117 6
 九条は宇宙のおもさ天道虫 重田 忠雄 117 6
 紫陽花やひねくれ一茶の蓑と笠 高橋 公子 118 2
 フクシマとなりて幾とせ蛇穴を 徳吉洋二郎 118 2
 解決をしないのも知恵ラムネ玉 普川 洋 119 9
 黒葡萄生涯無口な父であり 保坂ミエ子 119 11
 誰もいない私もない公園の秋 鳴戸 奈菜 119 12
 糸巻きの糸が纏れしまま夜長 野口 京子 119 12
 黒葡萄生涯無口な父であり 保坂ミエ子
 近頃は優しいパパ、物判りの良い父親が増えた。食事は子供優先の献立、盛るのも子供が先の家庭が増えた。給料振込以来父親の影がすつ

かり薄くなつてしまつた。

昔の父親は威風堂々、頼り甲斐があり、逆らうなんてとんでもない話。無駄口を利かない父の一言は一家の意志として有無を言わせず、従うのは当然であつた。

コンピュータに盛られた美事な黒葡萄の鎮もりに、お父上様のお姿を思いおこされた作者であらう。

泉 志眞子

料に生き料に逝きたる夏の蝶
 久保 筑峯 116 2
 家系図に寒椿のみ咲かせおり
 小張 直子 116 2
 巻き戻す亡夫との時間大花野
 斉藤すず子 116 2
 日脚伸ぶ介護に暮るる女にも
 加倉井允子 116 3
 見てくれる筈ふらごを押しやる
 加藤 法子 116 3
 この川の音より知らず糸とんぼ
 片山 依子 117 5
 時雨ふる波の伊八の荒ら木彫り
 庄司とほる 117 5
 キヤバの死を踏み踰り行く曼珠沙華
 細野 一敏 119 9
 ふるさとに忘れきしもの夕月夜
 中村 棹舟 119 9
 黒葡萄生涯無口な父であり
 保坂ミエ子 119 11

加納 英子

どか雪の多し地球が病んでいる
 金田めぐみ 116 4
 雲雀落つ十中八九胸に落つ
 塩野谷 仁 117 5
 花時雨おせん身投げの海の哭く
 佐藤 信顕 117 6
 河原行く男一人に蝶付きて
 佐々木 禎 117 6
 杉戸絵の象のまるまる春の闇
 鈴木まんぼう 118 3
 ともかくも今日のひまわり強く咲き
 高野 春子 118 3
 本当の声で鳴けない羽抜鳥
 秋尾 敏 119 3
 ストロローに菌形沖繩慰霊の日
 東 國人 119 3
 蟻の列放射線上異常あり
 林 阿愚林 119 9
 神宮のすいっちょ胸に来て止まる
 浪本 恵子 119 9

花時雨おせん身投げの海の哭く 佐藤 信顕
河原行く男一人に蝶付きて 佐々木 禎

掲句致しました、佐藤信顕様(故)と佐々木禎様御夫妻には、二、三回ほど句会に同席させていただきまして、いつも、心温かく、愉しく、深く温厚な、誠の御夫婦の御姿を拝しておりました、爽やかな珠玉の刻でございました。 哀悼黙祷

國武 和子

一通すつ燃やす闇より火蛾生まる
 直江 裕子 118 2
 初夏やドレッシングを縦に振る
 永井アイ子 118 2
 灯下親しいつもオンなる電子辞書
 高橋由紀子 118 2
 吐く息の消えゆく先や梅一輪
 鈴木 房州 118 2
 切り干の大根すでに訛りたる
 下村 洋子 118 3
 桜見る桜の風に抱かれて
 高橋富久江 118 3
 いなびかり立ち上るとき手について
 中里 結 118 3
 迂闊にも声が年取る寒卵
 田中 正恵 118 4
 底紅の溢るる路地や長崎忌
 関 千賀子 118 4
 聞き流すことも術なり夕涼み
 菅ノ谷文子 118 4

澤田 寿一

こおろぎを暗夜行路に誘いこむ
 菊地 京子 116 2
 老人のお洒落昭和を重ね着る
 川井 吉二 116 4
 血圧の折れ線グラフ年惜しむ
 棗 椿伊 117 5
 ばんそうこう一気にはがす梅三分
 安齋謙太郎 117 5
 猫の目の隙だらけなり冬日向
 佐藤美紀江 117 6
 サングラス世間の色を変えてやる
 椿 良松 118 2
 青柿の転がる今も人見知り
 高野 春子 118 3
 あの日から沖を見る癖いわし雲
 保坂 末子 119 9
 仁王立ちして夏草に負けている
 藤田 富江 119 10
 無人駅降りて花野の人となる
 原 悦子 119 12

第53回現代俳句全国大会

作品募集

投句締切は 7月31日 (必着)

現代俳句全国大会は、年に一度、現代俳句協会が主催（毎日新聞社後援）して行う伝統のある大会です。協会員に限らずどなたでも参加できますので、例年にも増してたくさんのご応募をお待ちしております。

お人様3組(9句)同時投句に限り、投句料6千円のものを5千円といたします。

- 応募規定 三句一組 二〇〇〇円 何組でも可。ただし、新作未発表作品に限る。前書き不可。所定用紙使用。〒住所、姓号、電話番号、協会員・会員外の別を明記。投句料は定額小為替(無記名)又は現金書留に限る。(必ず作品同封の事)。
- 送付先 〒807-0827 北九州市八幡西区楠木4-6-12 福本弘明方第53回現代俳句全国大会係 ☎093-6026058
- 締切 7月31日必着
- 顕彰 優秀作品(三賞及び秀逸賞等)を協会の機関誌「現代俳句」に発表するほか、協会刊行物に採録。
- 賞 大賞賞、毎日新聞社賞、特別選者賞、秀逸賞、佳作賞。
- 全国大会 平成28年10月22日(土)午後二時より、スプリングホテル小倉 〒802-0001 北九州市小倉北区浅野二-1-1 ☎093-6120391
- 記念講演 平野啓一郎先生(作家) 演題未定
- 講評 宮城静生会長はじめ協会幹部
- 懇親会 午後5時より(会費6千円)

春の吟行会

船橋文学散歩「海老川に沿って」

会場 船橋市勤労市民センター 平成二十八年四月二十九日(祝日)

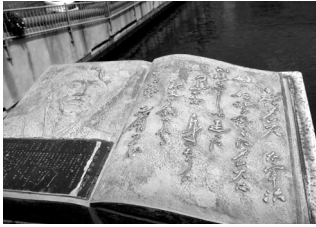
夜来の雨も上がり正に吟行日和、勤労市民センターに総勢七八名集合、二班に分かれ一班の出発は十時。高橋事務局長の案内にて出発。

昭和十年夏から一年三か月あまり太宰が歩いたであろう生活の道を歩き出す、耐震構造に建て替えられた船橋小学校の脇をぐるりと左へ。細い道を下れば海老川に架かる九重橋の上、川風がかなりの強さで吹き抜けて欄干中央部に二つの太宰の碑のレリーフが耀いている。これより先は宮本一丁目京成電鉄の高架橋が大きくカーブしている。

昭和十年ごろ小さな踏切を渡り家路へと急ぐ太宰の姿が目につかぶ、細い路地を右にまがれば旧居跡、現在は立て札のみ。海老川沿



海老川沿い散歩



太宰碑のレリーフ

いは躑躅の花が良き道標。本町通りへと歩を進める、右に曲がり船橋大神宮は遠くから手を合わせ、吟行終着地へ春はやてと共に歩く。

中央公民館前の文学碑は早くも夏の風情。揚羽蝶が太宰の深き思い、夾竹桃の影からひらりと。今回の吟行句会は世代を超えて中学生から高齢の方まで幅の広い参加者をえて一席に益々お元氣な岡田淑子さん、初参加の中学生荒居桃子さんは見事入選されました、季語の選択が素晴らしいとの秋尾会長からの講評。おめでとうございます。大盛況の吟行句会、準備万端、役員幹事の方々お世話になりました、有難うございました。

司会 徳吉洋二郎・イザベル真央
披露 羽村美和子・高橋宗史・星野一恵 (上野紫泉記)

〔入賞者作品〕 (二句のうち一句)

- つばめくる海の匂いの消えた街 岡田 淑子
- 若葉冷迷い込みたい路地がある 楠見 恵子
- 人間失格あれよあれよと春の蠅 山中 葛子
- 揚羽蝶一頭「めくら草紙」より 上野 紫泉
- メロス未だ走つてゐるか夾竹桃 井上けい子
- だらだらと虚構の春を曲がりけり 森村 文子

昭和の日昭和をけざる乾物屋
行く春の風がメロスを走らせる
こでまりでかけ算をする少女かな
行く春の左・左へ太宰追ふ
増田 豊子

巻き戻す一人ひとりの太宰に南風
さへづりや脚あそばせる少女像
里見 さち
春愁の太宰の空を持ち歩く
重田 忠雄
葉ざくらや私小説なら書けそうな
藤井 遥
昭和の日喜怒もいつしか風の中
黒澤 雅代
橋多き町を無頼の青嵐
清野 敦史

はつ夏のレリーフ太宰の呼吸音
山口 明
止まり木の太宰を探す昭和の日
高橋 健文
楠若葉風が磨きをかけてゐる
片岡伊つ美
海老川は真つ直く海に夏隣
小川トシ子

特別選者特選句
(秋尾敏会長 特選)
晩春や死ぬには川がせますぎる
小林 実
(渡辺澄副会長 特選)
船の橋十四番目は春の虹
白木 暢子

(並木邑人副会長 特選)
船の橋十四番目は春の虹
白木 暢子
(檜垣梧樓副会長 特選)
葉ざくらや私小説なら書けそうな
藤井 遥

(高木一恵副会長 特選)
巻き戻す一人ひとりの太宰に南風
並木 邑人
(山中葛子顧問 特選)
だらだらと虚構の春を曲がりけり
森村 文子
(横須賀洋子顧問 特選)
人間失格あれよあれよと春の蠅
山中 葛子

その他作品 (二句のうち一句、受付順)

船橋の太宰治と夾竹桃 荒居奈菜子
 逃げる春無頼派という泣き虫 渡辺 澄
 夾竹桃の咲くまで眠りたき太宰 保坂 末子
 横町に紛れておりし昭和の日 星野 一恵
 花は葉に旧居跡の生活臭 イザベル真央
 花はこれからなんて自由な夾竹桃 加藤 法子
 畳屋は自在の出入春の風 小高 稔
 レリーフの影の深みを芥子の花 羽村美和子
 あまやかに死を抱く橋よ春の終り 市川 唯子
 もの思う蛙はずでに王者めく 諸藤留美子
 風青しぞろぞろ吟行斜陽族 大塚 弘毅
 橋いくつある惜春の水景色 細根 葉
 時空飛び太宰はここに夾竹桃 園 喜江
 すかんぽを噛んで文学散歩道 宮下 奈緒
 かげろうに病んで海老川太宰路 芝崎 梓
 もの思ふ歩幅で渡る薄暑かな 岡田 春人
 海老川の暗流に酔い花は葉に 横須賀洋子
 ゆく春の日と影交わり太宰の碑 徳吉洋二郎
 風薫る太宰歩ける昔し路 山崎 幸子
 青年に淡き夢あり夾竹桃 松沢 貞津
 パピナール買ひしはいずこ霧ぐもり 檜垣 梧樓
 老扇の手形のぬくみ春惜しむ 遠藤 寛子
 裏切らぬ日や梧桐に太宰病む 高木 一恵
 春愁と思いぬ海老川の水面揺れ 高橋 宗史
 安白粉ふわり太宰となる蛙 細野 一敏
 青錆びしメロスの銅画春疾風 内田 庵茂
 とこしえに轉り止まず文学碑 伊藤 典子

花は葉に太宰は街を何故捨てた 金子 未完
 走れメロス行きしままなり夾竹桃 相澤 泰子
 太宰への思い飛び立つ揚羽蝶 三宅たくみ
 文学散歩虚構の春の橋いくつ 長濱 聰子
 おたずねの太宰は葉桜を転居 赤羽根めぐみ
 昭和の日海老川たゆたいトカトントン なかもと淑子
 水走る太宰の橋の春嵐 島 隆史
 新緑や風の音叉に耳すます 大見 充子
 さくら若葉初宮詣でのじやりの音 池田 博臣
 海神の強き囁き夏近し 秋尾 敏
 治さん花の下総佳かつたか 吉野 精
 海老川を走れ文士の風うらら 小林 俊子
 地に沁みるインクの匂猫の夫 三浦 侃
 窮屈な交通ルールつばくらめ 小野 功
 レリーフは太宰みどりの風わたる 中村 武男
 淋しさの真ん中に渦夾竹桃 坂間 恒子
 カナンまでメロスの駆ける若葉風 長井 寛
 「惜譲」のピラ電柱に夾竹桃 立花 洸
 昭和の日文学散歩語る橋 高橋 博
 太宰碑の眠りの深さは花は葉に 高野 礼子
 レリーフは太宰の勲章卯波立つ 木之下みゆき
 穏やかに海老川太宰忌を思う 田村 隆雄
 海老川の入水は駄目花つつじ 林 阿愚林
 裏路地からの望郷花は葉に 三上 啓
 何があるくねる路地ゆく柿若葉 末廣 陽恵
 夾竹桃のもれる陽にいとし碑かな 内田 正成
 緑さす碑の輝きの旗日なり 野口 京子
 船橋は文豪のまち春惜しむ 棗 楠伊
 外来種ナガミヒナゲン抜きなさい 沼山美津江

■秋の吟行会のお知らせ
 月日 平成二十八年十月三十日(日)
 場所 佐原(予定)
 詳細は次号(八月刊)でお知らせいた
 します。
 尚、本年度のミニ吟行会は来年一月に
 予定しています。



太宰治旧居跡



夾竹桃・文学碑



上位入賞者 (左より)
 山中葛子さん
 岡田淑子さん
 楠見恵子さん

津田沼研究句会報告

(於：津田沼一丁目町会会館)

●第二八五回(平成二十八年二月九日)

司会 横須賀洋子

白菜が羽ばたいてる月夜です
酒を酌むだけの弔い寒椿
鬼にまく豆が帝をころげゆく
冬晴れや生きた証の柿のへた
水鳥の一方的な別れかな
歎異抄折り曲げ海鼠食らいけり
老梅の憑きものおちて満開に
春光や地蔵が未来語りだす
梅林や影ほどほかに遊ばせて
吊し雛老舗の戸口清らかに
便利さが老いを惑はす冬の雲
灰色の検査入院桃の花
立春や夫婦の茶碗並びけり
うれいよと居てくれ返り花
辞書の海水山さがしに漕ぎ出せり
恋猫の六尺高きとこ奔る
狸穴と云う所あり豆を撒く
鯛焼のどこから食べる冬の空

楠見 恵子
徳吉洋二郎
佐藤 晏行
村上 澄子
横須賀洋子
林 阿愚林
なかもと淑子
金子 未完
山中 葛子
股野 久子
大塚 弘毅
イザベル真央
小林 実
吉野 精
池田 博臣
榎垣 梧樓
岡田 淑子
白木 暢子

横須賀洋子
山中 葛子
榎垣 梧樓
前島きんや
白木 暢子
佐藤 晏行
池田 博臣
吉野 精
深山きんぎよ

●第二八六回(平成二十八年三月八日)

司会 榎垣 梧樓

除染と云う文字のむなしさ麦を踏む
春の星ひとつ潤むは我がふぐり
簡単なかげろう立ちぬ石の上
もう臨月竹葉亭の桃の花
料峭や落としどころのない議論
さみしいから人を笑はせ紫木蓮
声上げて親しき友よ残り鴨
手造りの雛を仏に手を合す
ここに春あそこにも春鉄橋渡る
離婚にはエネルギーがいる片栗の花
天神の蕊の驕れる梅の花

岡田 淑子
徳吉洋二郎
楠見 恵子
イザベル真央
林 阿愚林
小林 実
股野 久子
大塚 弘毅
なかもと淑子
金子 未完
村上 澄子

横須賀洋子
イザベル真央
大塚 弘毅
前島きんや
山中 葛子
岡田 淑子
白木 暢子
村上 澄子
金子 未完
股野 久子
小林 実
徳吉洋二郎
佐藤 晏行
深山きんぎよ
林 阿愚林
楠見 恵子
吉野 精
なかもと淑子
池田 博臣
榎垣 梧樓

●第二八七回(平成二十八年四月十二日)

司会 徳吉洋二郎

柔らかき主張を食めり春キャベツ
印鑑のすみずみ掃除四月馬鹿
斑猫を飼って毎日探し物
胡瓜播く小さな顔の老夫婦
ギーと傾ぐ総武本線菜種梅雨
花びらのおまけ日曜のペーカリー
春風にくすぐられたい足の裏
轉やランチタイムのサラダバー
ふらここをめいっばい漕ぎ神童に
花の下ステップ踏んで行き行けり
逃げ水を追えば耳鳴り消えている
万愚節天上句会にぎわえり
黄昏の約束として花吹雪
寄り道のやうに来てをり熊ん蜂
下萌や保存可能な恋をする
灰灰と花菜あかりや黄泉の道
あかつきの星をめざして花筏
飛花落花去る者を追い見失う
起き抜けのバタートースト忘れ霜
桜湯は苦し夜桜お七かな

横須賀洋子
イザベル真央
大塚 弘毅
前島きんや
山中 葛子
岡田 淑子
白木 暢子
村上 澄子
金子 未完
股野 久子
小林 実
徳吉洋二郎
佐藤 晏行
深山きんぎよ
林 阿愚林
楠見 恵子
吉野 精
なかもと淑子
池田 博臣
榎垣 梧樓

横須賀洋子
イザベル真央
大塚 弘毅
前島きんや
山中 葛子
岡田 淑子
白木 暢子
村上 澄子
金子 未完
股野 久子
小林 実
徳吉洋二郎
佐藤 晏行
深山きんぎよ
林 阿愚林
楠見 恵子
吉野 精
なかもと淑子
池田 博臣
榎垣 梧樓

青葉研究句会報告

(於：墨堤吟行(牛嶋神社・三囲神社・見番通り他))

●第五十六回(平成二十八年二月二十五日)

司会 矢野 忠男

なで牛の瞳なき目に梅の花
蛇穴を向島まで人力車
質蔵をがんじ榻めに蔦芽吹く
軒に梅師匠好みのよろけ縞
枕橋の上に高速春かもめ
言問のなで牛の瞳や春愁
撫牛の尻はピカピカ春の風
竹の秋木歩の句碑の小さかり
「春奴」裾ひるがえす春の風
梅の香や言問団子分けて食う
蒲公英や喚き立ててる鶯嬢
水温むうす皮一枚の平和
冬昂あつ啄木が駆け出せり
春風の水辺夢二の女かも
コルセットは妊婦歩きぞ山笑う
春寒や途切れ途切れの数え歌

小林 実
徳吉洋二郎
星野 一恵
矢野 忠男
加藤 法子
長濱 聰子
小高 稔
鈴木まなぼう
細野 一敏
山崎 幸子
大塚 弘毅
芝崎 梓
並木 邑人
細根 栗
馬淵 津枝
三須 民恵

石井紀美子
椿 良松
細根 栗
馬淵 津枝
並木 邑人
鈴木まなぼう
小林 実
長濱 聰子
細野 一敏
山崎 幸子
徳吉洋二郎

●第五十七回(平成二十八年三月二十四日)

司会 並木 邑人

蛇穴をアラビア文字がむず痒い
身の内に陽炎救急治療室
蟻の列しんがりという自由席
春の土ゴム長靴のパビブペポ
一匙のスープのころ初ざくら
蛇穴を出て漢和辞書開くかな
約束のからまる小指轉りぬ
この世ではけむり追いかける猫
戯れし蝶妄想に迷い込む
紙飛行機飛んだふんわりとオムライス
気怠さは水にありけり夕おぼろ
露の臺車弥呼の里はこの辺り

芝崎 梓
石井紀美子
椿 良松
細根 栗
馬淵 津枝
並木 邑人
鈴木まなぼう
小林 実
長濱 聰子
細野 一敏
山崎 幸子
徳吉洋二郎

電線の電気芽吹きを見て来たか
桜接ぎ木して埋戻す穴六穴
四月馬鹿株の値上がり待つ人々
春愁とは何トーストの耳かじり

(於：千葉市民会館・第五会議室)

●第五十八回 (平成二十八年四月二十八日)
司会 三須 民恵

花筵元通りには畳めない
草青む彼の日の樹々は切株に
靖国とあるく魍魎の靴の音
囀の中の低きは嘆きとも
街灯の背中は病んで昭和の日
花冷えや麒麟は首を持て余す
江戸城の鬼門封じや紅つつじ
春惜しむ己を舐ふ杭の無し
葉桜や鬱という字がほどけない
うかつにも後期高齢青き踏む
泰然と虚実のはざま蟾蜍
楠若葉何とも出来ぬ地震続く
漣が寄る花びらが云い付ける
読みさしの眼蛙が借りたがる
広島の被爆へ献花G7
肥後の国の地底蠢めき花は実
雨のたび美しくなれ蚊蝶

柏研究句会報告

●第四十五回 (平成二十八年二月十三日)
(於：柏市「ハックルベリー」2階)

司会 栃木 きよ

銀河系その片隅の電子音
紙を切る三寒四温指先に
血液のま横に奔る春の風邪
佇めば吾も花なり探梅行
寒梅や白きもの降る仁王門
岩石の潮の満干や花菜風

啓蟄のやわらかき水買いにゆく
木椅子置く雲に消へたるひとのあり
寒の影視線は空を漂流す

司会 栃木 きよ

●第四十六回 (平成二十八年三月十二日)
天も地も大海原も花菜風
青き踏む四楽章を耳に秘め
墨東のバーのちいママ桜もち
性同一カップル春の証明書
蒼穹に銀河の姿花こぶし
鳥雲にホチキス止めの肋骨
大根煮る贅沢な街より戻り
たつぷりとおぼろを舐める庭の猫

●第四十七回 (平成二十八年四月九日)
司会 野口 京子

彼の世まで鴛色の雲桜東風
吹きだまる花の吐息の湿りかな
花の国来し狩人のまどろめる
桜が踊る樹令三百年
花過ぎのにわかにくすむ皿小鉢
群集の波の狭間を花吹雪
未視感かな郵便受けが蝶を吐く
簡単な廃車手続き糸桜
たつぷりと吐息吸いこみさくら散る
人の世の浮き伏しに似て花筏

図書紹介

遺句集『零』 神山 宏

平成二十八年四月十五日 現代俳句協会
風邪心地ビルの隙間に海がある
冬の鳶河口は海に突き出たり
山並みの明朗にして秋の航

ひろば

■市原市春季俳句大会

四月二十四日、俳人協会事務局長の染谷秀雄氏を招聘し、五井会館において開催した。兼題の部は県内から四八三句、当日の席題は四十八人の出席を以て実施された。(並木邑人記)
☆兼題の部／花水木・立・雑詠三句一組
市原市長賞
今日よりは父を一人に山桜
市原市俳句協会賞
一列は一途のかたち鳥帰る
市議会議長賞
松本 正子

展け行く若き町並花水木
教育長賞
内田 聰子
名山も名の無き山も囀れり
伊東 泰子
☆席題の部／巢箱・蝌蚪
市原市長賞
市原市俳句協会賞
城本美寿々
足生えてそれより蝌蚪の水にこる
安澤善三郎
市議会議長賞
長濱 聰子
教育長賞
荒井ひろ子

■第一回千葉県俳句大賞

五月十五日贈賞式が開催され、当協会より次の二氏が受賞された。詳細は次号に掲載予定。
準賞 句集「獺の祭」 三苫 知夫
奨励賞 句集「展翔板」 林 ゆみ

《會員・会友の近況》

- ・今年も櫻に出逢えました。母は九十六才まで居られました。妹も私も母の血を受けついで居るので、家族は東京オリンピックは観られると言ってくれますが、自分ではとてもとても思っています。俳句を道づれに頑張っています。(伊東 靖子)
- ・桜と共に吟旅、吟旅桜満開の三月下旬、伊豆高原から城ヶ島。四月二十九日は現俳千葉の船橋文学散歩、暮春の五月初旬は京鹿子本部主催の金沢和倉温泉と、高齢者頑張れます。(上野 紫泉)
- ・深川から始めて「奥の細道」を歩いて村上まで来ました。五月の新緑の頃、出雲崎近辺を歩いてみるつもりです。(宇佐見房司)
- ・毎号拝読し会員の方々の作品のすばらしさに感動致して居ります。小生昨年「腸」の大手術をし病後故、佳い作品が出来ませんが、お笑い下さい。(明石春潮子)
- ・八十代半ばとなり、幼き昔や転生の世がなんとなく気になる今日この頃です。(浅野 天一)
- ・現在、千葉県立長狭高校定時制に勤務し、国語を教えています。定年まであと五年このまま定時制で終わりそうです。(東 國人)
- ・日常生活に追われる日々でございますが、ほっと一息ガス抜きが俳句。自分史を五・七・五に認めながら四季の変化に命の実感を味わいつつの昨今でございます。(岩岡 方子)
- ・視力障害で、失明と迄は行きませんが近くも遠くも色の見分けも困難です。吟行会にも行かれないのが残念です。子どもの頃に暗い部屋での本の読みすぎが原因と思われる。(渡邊 廣子)

掲示板

《會員・会友異動》

- 逝去 (会員) 佐藤信顕、庄司とほる、川井吉二、渡辺 護
- 入会 (会員) 大澤重市、東 公子、望月 彩
- 退会 (会員) 鈴木敬治、高橋文哉、増田忠彦、横川邦子、実藤公一、田中喜翔、馬場暁子
- 移転 (会友) 久保さちを
- 移転 (会員) 北野耕太 (木更津市請西東へ地区内移転) 細根 菜 (香取市富田へ地区内移転) 小林奈央 (東京都区へ移転) 高遠朱音 (埼玉県へ移転)
- 俳名変更 (会員) 末廣陽恵 (旧俳名末広陽恵)
- 平成二十八年年度臨時幹事会
 - 日時 平成二十八年四月二十日(火)
 - 場所 船橋市勤労市民センター
 - 議題
 - 一、当協会の今後の活動(一般事項)について
 - 一・一 新幹事の紹介
 - 一・二 幹事会及び幹事の役割について
 - 一・三 運営体制について(引継ぎの結果報告共)
 - 二、平成二十八年年度定期総会・俳句大会の結果について(概略)
 - 三、平成二十八年年度春の吟行会について
 - 四、平成二十八年年度秋の吟行会計画について
 - 五、第二十三回関東甲信越静ブロック会議について
 - 六、現代俳句協会(本部)の動向について
 - 七、第一二二号会報について
 - 八、その他

◇訂正◇

一二〇号を左記の通り訂正しお詫びいたします。
 13項上段左より四行目の推薦者
 正 後藤 章 誤 後藤 明×

□事務局・編集部だより□

- 「現代俳句協会」ホームページの地区活動に千葉県現代俳句協会の頁がありますので、一度検索してみてください。
- 三月二十日の定期総会・俳句大会、四月二十九日の春の吟行会には多数の皆様に参加頂き盛会のうちに終えることが出来ました。皆様のご協力、ご支援に感謝いたします。
- 今号より徳吉洋二郎、木之下みゆき、小林俊子、高野春子、三須民恵の五名が編集を担当しますので宜しくお願いいたします。

現代俳句千葉 第一二二号
 平成二十八年五月三十一日発行

発行人 千葉県現代俳句協会
 会長 秋尾 敏
 現代俳句千葉編集部
 〒261-0004 千葉市美浜区高洲 三十五-六-一六〇二 徳吉洋二郎
 〒278-0043 野田市清水五二七-一〇 高橋 宗史
 千葉県現代俳句協会事務局
 〒278-0043 野田市清水五二七-一〇 高橋 宗史
 TEL・FAX 〇四一七一二五-一三三八二